

【一般口演2】 第8席

上七竅における口の役割について

東京 小池 盛夫

上七竅は、『靈枢』脈度第十七に見える言葉で、九竅と対比されるものである。九竅とは、全身にある九つの穴を指す。顔（面）にある二つの目、二つの耳、二つの鼻孔、一つの口の七穴に加えて、前陰と後陰の二穴の合計九穴。まさしく穴である。ところが上七竅になると、その字の如く顔にある七穴を指すはずなのに、先の九竅の七穴に相違して、別なものが加えられている。それは舌である。

すなわち、上七竅とは、二つの目、二つの耳、一つの鼻、一つの口、そして、一つの舌の七穴を指す。しかし、舌は穴ではない。にもかかわらず竅の一つのとして唐突に出現する。

上七竅と九竅は同じように見えても実際は違うのである。

『素問』の金匱真言論篇第四と陰陽應象大論篇第五には、前者に九竅、後者に上七竅が配記されている。

五蔵 肝心脾肺腎

九竅 目耳口鼻二陰（金匱）

上七竅 目舌口鼻耳（脈度・陰陽應象）

両者の違いは、心と腎である。『素問』五常政大論篇には、九竅と上七竅が混合された配列（肝目、心舌、脾口、肺鼻、腎二陰）が見られるが、九竅の配列は、金匱篇のみで、他は上七竅（五官ともいう）が配され、この方が広く応用されているのである。

医書以外に目をやると、その配列はまちまちで、一定ではないが、医書に関してはとりあえず金匱篇の九竅、陰陽應象篇の上七竅の配列が行われているのである。

九竅は古い時代から使われている言葉であり（『呂氏春秋』『管氏』）、金匱篇はそれを取り入れ、陰陽應象篇はそれとは別に考え出された上七竅を取り入れている。両者の年代差か考え方の違いであろう。

それでは、竅でもない舌が配されている上七竅とは、いったい何を根拠に考え出されたものであろうか。